
都会のトム&ソーヤ SECRET EPISODE

藤龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

都会のトム&ソーヤ SECRET EPISODE

【Nコード】

N2702H

【作者名】

藤龍

【あらすじ】

内藤内人と竜王創也のミニ冒険物語！ 鍛えこまれたサバイバル能力をもつ内人と
頭脳明晰の創也がさまざまな事件に巻き込まれていく！

1st Episode: 謎の転校生（前書き）

この話は主人公の僕（内藤内人）が毒舌家でゲームオタクで頭脳明晰の

童王創也と共にさまざまな事件に巻き込まれていくという話です。

今作の舞台はハロウィーンパーティーを控えた学校。

いったいどんな事件が巻き起こるでしょうか・・・

もちろん登場人物は他にも山ほどいます。

それは作品内で説明する予定です。

1st Episode：謎の転校生

ある日、学校で事件が起きた。

今は10月、学校でのハロウィーンのイベント開催が近づいてきた。

「突然だが、今日は転校生がやってくる。みんな仲良くしてやってくれ。」

いきなり先生がいだした。

この時期に転校生って珍しいな・・・

いったいどんなやつなんだろう・・・

「ちなみに彼は外国人だからな。」

外国人・・・！ 僕はその言葉に耳をかたむける。

なんたつてこの学校に外国人はめったに來ないからだ。

僕は聞いてみた。

「外国人ってどこからきたんですか？」

「生まれはオランダらしいが、すぐに日本にきたらしい。だから日本語しか話せないらしいが、詳しい事はよく分らん。」

いわゆる外国生まれの日本育ち、てやつか・・・

「とりあえず、はいりたまえ転校生君。」

先生が言うと同時にメガネをかけた金髪の男の子が入ってきた。

「はじめまして、アレックス・ライニーです。よろしく願います。」

日本語ペラペラだ・・・

「さあ、みんなも自己紹介自己紹介！」

先生が言った。

みんなの自己紹介が終わった頃、下校を知らせるチャイムが鳴った。どうせならこのまま学校に留まりたい… なぜならこのあとすぐに塾があるからだ・・・

創也を見るとボーっとしている下校のチャイムにも気付かないってことは何を考えてるんだろう・・・

「創也、行くぞ！」

「・・・・・・」

「創也！」

僕がとなりつけるといきなり我に帰ったかのようにアイツは目を覚ました。

「ああ、内人君か・・・どうしたんだい？」

創也の何事もなかったかのようなしゃべり方

「それはこっちのセリフだ！ 下校のチャイムにも気付かないなんて何考えてたんだ！」

「いや、さっきのアレックス君が気になってね・・・」
「はぁ・・・？ どういう事だ？」

「この時期に転校生なんて珍すぎる。 彼にはなにか狙いがあるんじゃないかと思う。」

「なにバカなこと言ってるんだ。 おまえゲームのやりすぎじゃないの・・・」

「そうなのかなぁ。」

そうとは思えん！

そう言おうとしたとき、突然ドアが閉まりカギが掛かった

「え！？」

ドアをあけようとするが、・・・あかない！！

「閉じ込められた！！」

2nd Episode…タイムリミット

・・・閉じ込められてる、けど落ち着いている
別に爆弾や殺人犯が中にいるわけではない

さて、どうやって脱出するか・・・

「創也、今何時何分だ？」

「今、5時12分前」

あと48分で塾が始まる　それまでの間に脱出して塾に向かわないと母さんから大目玉をくらってしまう・・・

「こういう風に脱出するのかな」内人くん

創也がのび太のような口調で言った。

「ふざけてないでおまえもすこしは考えろ！」

「考えてもむだだよ。」

教室の外から合成させられた声が聞こえた。

「あと10分で爆弾が爆発する。　だがその爆弾にはスイッチがついているから、見つけられたら切るだけだ。　ただ残り時間が5分になると切ることができなくなる。」

嘘だろ・・・　マジかよそんな・・・

どうすればいいんだよ・・・

そんなとき僕のアタマの回転が急激に早くなった！

「窓から飛び降りよう！」

「内人くんここは4階だよ。　ここから飛び降りたら大けがをするよ。」

・・・そうだった。

「一番安全なのは爆弾を見つけ出す事じゃないのかな。」
たしかに創也の言うとおりだ。

僕らは爆弾を探す作業に入った。

「あと8分で爆発する」

「残り時間なら心配ない。爆弾は見つけたよ。」

「本当か！」

僕は爆弾をみた。信号の色と同じスイッチと「ON／OFF」の切り替えスイッチがONになっている。

創也がOFFにしようとした。

「ちよっとまった！」

「どうして止めるんだい？」

「OFFにしたと勝手に爆発する仕掛けかもしれないぞ！」

少し考えた後、

「なるほど。」

・・・だめだコイツ 爆弾を止める事しか頭に入っていない。

「・・・あれ？」

「どうしたんだい？ 内人くん」

「なんだかすっごい大きな事を見落としてるような気がするのだが・

・・・」

・・・なんだろう？

本当に何かを見落としている。

「いまさら何か分かったとしても もう遅い。残り5分だ。」

そのとき僕の頭の回転がまた激しくなった！

「・・・まだ終わっていない！ 教室の扉は内側から空くはずだ！」

僕は扉に手を伸ばした！ 扉はロックされている、でもこれを解除すれば・・・！

僕はロックを解除した。ガラガラと音を立てて開く扉・・・ 成功だ！

「よくやってくれた内人くん。」

でも分からない事がある。

「でもどうして簡単に扉が開いたんだ？」

廊下には誰もいない。でもよく見るとテープレコーダーが落ちて

創也がそれを拾い上げて言った。

「犯人の狙いはおそらく僕らじゃなくて教室だったのだろう。」

「なんでだよ！ どうせまたお前が狙いだろ！」

「失礼だな、何の根拠があつてそんな事が言えるんだい？」

「まずお前は超巨大グループその名も『竜王グループ』の跡取り息子。その上お前が持っている

超巨大な知識は一回プリントを見ただけですべての問題とその答えを丸暗記してしまうほど。

紅茶の味にうるさく、その上拾つて来たヤカンでお茶を沸かしてもへっちゃら。

毎日廃ビルに引きこもつてコンピュータを相手にするゲームオタク。

さらにその上・・・」

「余計なことを言つてると爆発に巻き込まれるよ」

・・・しまった！ すっかりそのことを忘れていた！

僕らは大急ぎで一階の昇降口までダッシュ！

・・・でも創也はあわててない。けどそんなことかまうもんか！

僕は創也の首根っこをつかんで昇降口を飛び出した！（でも靴を履き替え忘れた・・・）

そして校舎を出たころには5時ジャスト！ 爆弾が爆発！

・・・ってあれ？ 爆発しない・・・？ なんて？

「爆発しないのは当たり前だよ 僕がさっき赤いスイッチを押してきた。」

「なんで勝手に押すんだよ！」

「簡単だよ。そこら辺にある信号を思い出してごらん。」

僕は言われたように考えてみた。

赤は止まれ

黄は注意

青は進め

僕はこれを創也に言った そしたら創也が、

「That's right! つまり青なら爆破、黄ならスピー

ドが早くなる、赤なら停止。」

「じゃあ、あの切り替えスイッチは？」

「あれはOFFになると色のスイッチが使えなくなり、ONだと使えるようになるって仕組みさ。」

・・・本当にあの時止めてよかった。

「創也、今何時？」

「今5時10分」

・・・本当なら塾に行かなきゃダメだけど今回の事件で頭を使いきた。

「もう今日は砦で休む事にしよう・・・」

「走る？それとも歩く？」

「歩こう・・・もう疲れたよパトラッシュ」

「どうでもいい事だけど、どうしてパトラッシュが出てくるんだい？」

・・・僕は答えない。今はもう休みたい

・・・この事件がきっかけでまたあの集団と戦う事になるとはその時の僕には分らなかったようだ

3rd Episode：イベント準備

あの事件から約一週間がたった。

あの爆弾はあの後どうなったって？

それは脱出した日の夜、創也が竜王グループの特別部隊に頼んで秘かに爆弾を処理してもらったので、クラスの連中は何も知らない。これから「ハロウィンパーティー」に向けての準備がある。

僕、創也、達夫、堀越、直樹の5人は劇をやる事になっている。

劇の題名は「フランケンシュタイン」

役は以下のようになっている。

僕…フランケンシュタイン

創也…フランケンを作った科学者ソーヤ（名前がそのまま！）

達夫…フランケンの秘密を探る探偵

堀越…フランケンが恋をする金持ちのお嬢様エレナ

直樹…エレナお付きの使用人コーゼフ

分かっていたただけだろうか

僕は僕的に得な配役になったと思う

なぜなら僕は堀越美晴のことが好きだからだ

でも、堀越は創也が好きで、創也は堀越の事をクラスメイト以上には思っていないらしい。

だから僕は堀越に近付ける少しのチャンスを逃したくない。（でも創也には絶対勝てない・・・）

劇の練習は早く進んでいる。

残り時間があと二日しかないからだ。

でもまだ中盤（起承転結でいう承）のあたりだ。

急がないと中途半端なまま始まってしまう。

「だーかーらー！そこはそうじゃないって何度言ったらわかるん

だ！」

リーダーの達夫が吠えている。

「そ、そんなこと言われたって・・・」

「直樹！ お前やる気あるのか！？」

「だ、だってよ」

「どーすんだよ！ あと二日なんだぞ！」

うーん このありさまだと間に合わないぞ・・・

もちろん創也は脚本を丸暗記している。

このまえ聞いたら「クラスの連絡網を覚えるよりも簡単だったよ」
つとあつさり言った。

放課後の砦で、僕は創也の入れた紅茶を味わっている。

「砦」というのは竜王グループから見放された廃ビルで、入り口は
だれも気づかないような

とても狭い路地（っていうかビルとビルの間）にある。

創也は放課後にはこの「砦」でゲームの研究をしている。

でもなぜ「秘密基地」ではなく「砦」なのかというと、

それは創也が自分の「最強のゲームクリエイターになる」という夢
を守るためらしい。

僕はここへ来るといつも本を読んだり紅茶を飲んだりしている。

ここにあるものは全部、創也が拾ってきて直したものだ。

話をもどそう。

僕は紅茶を飲み終え創也にこのままで大丈夫なのか、と聞いてみた。
すると創也は、

「たぶんこのままだとヤバイだろう。 なんとかする方法はないの
だろうか・・・」

と言った。

いや、僕がそれを聞いてるんだって！

このままじゃ中途半端なまま本番を迎えてしまう。

そのとき、僕の頭に名案が浮かんだ！

「そうだ！ 放課後にも皆で練習すればいいんだ！」

うん、これならなんとかなるだろう。でも、

「塾はどうするんだい？」

・・・忘れてた。

「それに練習するにしても皆、集中できないと思うよ。」

「なんで？」

しばらくの間があいた。

「・・・あの人がついてくるから。」

そういいながら外の大通りをみた。

そうだった・・・ あの人こと「卓也さん」がいるんだった・・・

4th Episode：作戦会議

「卓也さん」・・・

彼は創也のボディガード的存在。

そして彼には「何人たりとも邪魔はさせません!」という心意気がある。

その通りにまるで武道の達人のような人だ。

そして創也が危険な行動をとると、頭に巨大なゲンコツが落ちてくる。

その上創也がどこかへ行くと、もれなく卓也さんもついて来る。

そんな仕事を彼は辞めたがっている。

原因は創也だ。 たしかに創也のようなヤツのお守りとなると誰だっというやになる。

そして彼は保育士になろうとしている。だが、彼の微笑みは「泣き子も黙る」という微笑だ。(しかし彼はそれが天使の微笑みだと思っている。)

「卓也さんがついて来ると、皆緊張するだろうね。」

・・・確かにそうだ。

彼がじつとなにかを見る目はまさに獲物をみつけた蛇のようになる。・・・つまり彼の視線が強すぎるってことだ。

と、いうわけで誰も集中できない。

となると休み時間も昼食の時間もぶつぶつして練習しなければなら
ない・・・

「安心したまえ内人くん。 僕がとっておきの方法をみつけたよ。」

この口調絶対なにかたくらんでるな・・・ その手にはのるか!

「今考えたのだが、夜に学校に侵入して練習するっていうのはどう
だい?」

「・・・おまえ、どう考えたって無理にもほどがあるだろ！」

「そうかなあ」

あたりまえだ！ しかもそれだと最初に僕が言った塾のことはどうなる！

「塾がない日を選べばいいじゃないか。」

・・・あっさり言われた。でも皆がちょうどよく塾がない日なんてあるのか？

「あると思うよ。」

「そりゃほかのメンバーはそうかもしれないけど、僕は水曜日と日曜日以外は塾があるぞ。」

「じゃあ水曜日に塾がないか僕から聞いてみるよ。」

「いや、だからどうやって学校に侵入するんだよ。」

「それに関しては心配ない。」

「それから僕は塾がない日は思いっきり休むつもりなんだけど・・・」

「それに関しても心配ない。」

・・・つまり何を言っても無駄ってことか

「じゃあ、さっそく聞いてみるよ。」

携帯電話を取り出し、番号を押す創也。 一覧を見ないで押すのがさすがだ・・・

「皆、水曜日は大丈夫だと言ってるよ。 よかったね、内人くん。」

・・・よくない、ぜんぜんよくない。

僕の水曜日、帰ってきてくれー！

5th Episode: 第二次作戦会議

翌日・・・

僕らは休み時間に集まり、作戦について話し合った。

一通りの説明が終わった後、質問タイムとなった。

「なあ創也、侵入するって言ってもよ、この前のようにうまくいかないかもしれないんだぜ」

達夫が言った。確かに達夫の言う事は正しい。

ただ、僕には分かる。創也には何を言っても無駄だという事を。

そしてそれは必然的に僕を巻き込む。

「安心したまえ。この前うまくいった理由を考えればいいんじゃないのかい？」

「理由・・・」

やばい！　そう思うより早く僕の体は動いていた。

「ちょっと、トイレ行ってくる・・・」

僕は立ち上がり教室から出ようとしたが、創也に腕をつかまれ、脱出する事は無理だった・・・。

「どこに行くつもりだい？」

「いや、だからトイレだって言っただろ！」

「そう言って逃げるつもりかい？」

「・・・」

「さっさと座りたまえ」

くそ、逃げられない・・・！

「・・・それで話に戻るが、侵入方法は前と同じ。先生達がいなくなるまで隠れて、いなくなったところで侵入する。そして静かに練習する。これでどうだい？」

「静かに練習ってどうやるんだ？」

がちやがちややる場面もあ

るんだぞ」

「それに関しては大丈夫だ。

竜王グループ開発部が開発した

『赤外線防音マシン』があるからね」

創也がポケットからメモリースティックほどの大きさの機械を6個ほど取り出した。

・・・こんなので防音されるのか？

「現代日本の超一流開発部をバカにしないでくれたまえ。一応テストもしておいた。ダイナマイト20個分が爆発したとき

の音までなら防音できる」

・・・いや、ダイナマイトが20個も爆発したら防音どころじゃないと思うぞ。

「じゃあ、これまででなにかまた質問はないかい？」

「あ・・・じゃあ、わたし・・・いいかな？」

「どうぞ」

「この前に侵入したときは女子トイレから入ったって聞いたけど・・・」

「ああ、そうだよ」

「今日はトイレは開いてないし、侵入できるところもないと思うんだけど・・・」

それを聞いて、創也は黙り込んだ。そしてその後、

「そこまで考えていなかった」

・・・やっぱるか！

「この猪突猛進の大バカ野郎!!」

「そう騒ぐ事はない。忘れたのかい、僕らにはドラえもんがいるということを」

「・・・あ」

逃げたい・・・！でも逃げれない！

「そういうわけだからよろしく頼んだよ、内人くん」

「いや、だから・・・」

「お願い！」

堀越美晴にそう言われ、僕は反論が出来なかった・・・。

うーん、なんとかするしかないな・・・。

5th Episode: 第二次作戦会議（後書き）

やっと更新しました

・・・本当におくれてスママセン！

6th Episode::侵入者たち(前書き)

超久しぶりの更新です。

6th Episode：侵入者たち

水曜日の夜――。

僕ら・・・意欲あふれる四人と巻き込まれたひとり、体育館の裏で先生たちがいなくなるのを確認し、校庭へ出た。

「で、この前と同じように侵入すればいいんだよね？」

僕は創也に聞いた。

「いや、『この前と同じ』にはいかない。トイレの窓は開いて

ないし、どこか侵入できる場所があるのも確認していない」

だからそんなところにどうやって侵入するんだよ！

「とりあえず、行くだけ行ってみたまえ」

「……………」

僕は大きなため息をつき、みんなからベルトを借りた。

「すまん、俺、持ってない」

「ごめん」

「ごめんね」

結局創也からしか借りられず、集まったのは二本だった。

・・・どうしよう。

そのとき、僕の視界にふと、白いものが見えた。

雨樋の下、草原に隠れるように。

僕はとっさにそれを持ち上げた。

これは、タオルだ。

そしてその上にどこかの鍵とメッセージカードが。

『こんなこともあるかと思って用意しておいたわ』

真田女史だ。

「創也、この鍵どこのか分かるか？」

僕は創也に鍵を見せた。

「これは、屋上の鍵だね」

「たしかか？」

「この前職員室に行った時に鍵の形を全部覚えておいた」
ありがとう、創也。

僕はあの時のようにベルト二本で輪をつくり、僕と雨樋を輪の中に
入れる。

ここで思い出してもらいたい。 雨樋はところで固定され
ているのだ。

そこで、僕は真田女史からの贈り物の一つ、タオル（あれだよあれ。
おしぼりのような感じになってるやつ）をベルトと同じようにし、
雨樋の後ろで結び、固定する。

引っ張ってもほどこけない。 これで、大丈夫だ。

僕はあの日のように雨樋から上体を遠ざけるようにつつぱり、登っ
た。

雨樋が固定されてるところにきたら、タオルをほどき、固定された
上にかける。 そしてすこし上へ移動してから、ベルトの輪を上
にかける。

この繰り返しで、僕は屋上まで登った。

横に手をのばし、鉄柵（フェンス？）を掴んだ。

そして屋上に這い上がり、中に入った。

そして次に屋上の扉のドアノブをまわしたが、開かない。

ここで僕は第二のアイテムを使った。

ガチャッ

鍵が開く音がした。

僕はドアノブをまわし、中に入った。

一階まで降りて、職員用玄関に行き、これまたこの前のように戸を
あけた。

なんの異常もない……はずだ。

僕は開いた戸から、みんなを中に入れた。

「じゃあ、練習を始めようか」

創也が「赤外線防音マシン」を設置し、僕は電気が窓からもれないようにカーテンと暗幕をガムテープで固定した。

「おう！ みんな、明日が本番なんだ！ 今日このときで完璧にするぞ！」

達夫の掛け声が終わり、練習が始まった。

練習はいままで以上に進んだ。

クライマックスのシーンも終わり、3分間の劇の練習は終わった。

「よし、じゃあ今日はこれまで！ 明日は今日以上の最高の演技で行くぞ！」

達夫の掛け声が終わるのを確認し、僕は教室を出ようとした。
だが……。

カッーン、カッーン……。

階段を降りてくる音、そしてそれは前よりも小さかった。

カッーン、カッーン……。

音はだんだん小さくなり、次第に無くなっていった。

「ま、またかよ……」

「また、創也くんのボディーガードさんじゃない？」

堀越が創也に聞いた。

でも、今のは卓也さんじゃない。 あの人なら気配を殺すだろう

し、まず僕らの教室に来るはずだ。

「いまのは卓也さんじゃないよ。 卓也さんは上司の黒川部長に

呼び出されて今日は僕のボディーガードをしていない」

やっぱりね……。 ん、ちょっと待てよ……。

「創也、今日は卓也さんはいないってことは……。 別に学校に侵入してまで練習する必要は無かったんじゃないのか？」

「……え？」

創也はしばらく考えた後、

「そこまで考えてなかった」

と言った。

うん。 やっぱりこいつはバカだ。

「そんなことより、早く出ようぜ」

達夫があせっている。 どうやら気が小さいらしい。

「どうする、創也？」

「・・・僕としてはさっきの足音の正体を調べたかったが、仕方ない。 今日は帰ろう」

防音マシンを解除し、僕は職員用玄関から外に出た。

「じゃあ、また明日な！」

そう、このとき創也の言うとおりに足音の正体を探っていたら、もしかしたらあのとき、あんなことは起こらなかっただろう。そんなことをこのときの僕は、まだ知らないでいた。

7th Episode: 本番、そして事件

10月31日、ハロウィンパーティー本番。

僕はいまさらながら、日本の学校でハロウィンパーティーなんて普通あるのかな・・・と思っていた。

もちろん創也も同じことを考えていたらしい。

なんだかんだで次の劇が僕らの番になっていた。

「よし、みんな頑張ろうな！」

「おーーーーー!!!」

達夫の掛け声とみんなの掛け声。

そういえば、主人公は僕だよな・・・。
なんで達夫がリーダーなんだ？

そんな僕の疑問をよそに、

「内人くん、ちょっといいかい？」

と創也が呼んできた。

僕はその顔を見て、創也のもとへと行った。

そのときの創也の顔は、何かを考え、その答えに困った時の顔だ。

「どうした、創也」

「・・・君は去年はこのパーティーが無かったことを知っているかい？」

「・・・言われてみれば、無かったような気がする。」

「そう、去年は無かった。今年の初めに貰った一年間の学校行事にも書かれてなかった」

「ということは、だれかが急に言い出したってことか？」

「そういうことだ。ただ、問題なのは誰が何のために言い出したのか・・・」

普通の人ならこんな事は考えないだろう。でも創也は普通じゃ

ない。

それに、現に僕も爆弾事件に巻き込まれている。何も関係が無いとは考えにくい。

「内人、創也、そろそろ準備しろ。始まるぞ」

直樹に呼ばれ、僕らは準備を再開した。

「創也、考える事はいろいろとあるが今は目の前のことに集中しよう」

「・・・そうだね」

本番、10秒前！

「ではこれより、劇『フランケンシュタイン』を始めます！」

アナウンスが響き、幕が開く。

始まりは、鉄のベッドの上にフランケンの格好をした僕が寝かされ、それを科学者のような顔をした創也が見ているシーンだ。

僕は脚本どおり、話を開始する。

「ウ・・・ガガガ・・・」

これは僕だ。フランケン是最初、なにもしゃべれない。

「目が覚めたかね？」

これは創也。創也の顔はむさくるしい髭で覆われている。

「ウガ・・・ガ・・・」

よし、順調だ。

ガコン！

・・・え？

上のほうでなにかが外れる音がした。

「君は、一度死んだ人間なんだ」

創也は気づいてないらしい。

ガコン！

・・・まただ。

「本来なら君はもっと人間らしい姿で生まれ変わるはずだったのだが」

僕は胸に、なにか嫌なものを感じた。

山で遭難したときのような・・・。

僕は寝かされた状態で、しばらくは上を見ることになるからわかった。

創也の真上にあるスポットライトが・・・落ちる!!

でも気づいた時にはもう遅かった。

もう、すぐそこだ。

「創也！　そこから離れろ!!」

「え？」

ガシャアアアン!!

僕はとっさに目をつぶった。

・・・目を開けると、そこには右肩から血を流している卓也さんがいた。

「大丈夫ですか、創也さま、内人さま」

「え、はい。　僕は大丈夫です。　・・・創也!!」

僕はとっさに創也を探した。

「なんだい？」

創也は僕の横に倒れていた。

どうやら、大丈夫のようだ。

「卓也さん、ごめん・・・」

「なにをおっしゃるのです。　わたしは創也さまをお守りする為

にここにいますのです。　こういうときには怪我をするのが当然です」

「ありがとう、卓也さん」

僕は今思った。　卓也さんが保育士になったら、一体誰が創也を守るんだろう・・・。

「みなさん、落ち着いてください！　今回のハロウィンパーティーは中止になります！」

アナウンスが響いた。

「内人くん、ちょっと付き合ってくれないかい」

創也のこの目、何か謎が解けた目だ。

「分かったよ、創也。 謎が解けたんだろう？」

創也は大きくうなずいた。

「It's a show time！」

僕らは校庭へ向かった。

8th Episode…謎解き

校庭にはいま、誰もいない。

いや、一人、学校から出ようとしている人がいた。

「アレックスくん」

「あ、竜王さん、怪我は大丈夫ですか？」

突然現れた謎の転校生、アレックス・ライニーだ。

「どうして僕が怪我をしたと思うんだい？」

怪我をしたのは僕を

かばった卓也さんなのに」

「……………」

「それにアレックスくん、どこへ行こうとしているんだい？」

「いやですね、竜王さん。」

先生から聞いていませんか？

僕

は今日、引越すんです」

アレックスは微笑みながらそう言った。

でも目が笑ってない。

「どうして今この瞬間に引越すのか、それが疑問でならないんだ」

「いつ引越そうと人の勝手でしょう？」

「君は、^{プランナ}頭脳集団だね」

創也は唐突に言った。

「なんですか、その『プランター』って」

一瞬の間が空き、アレックスが先にしゃべった。

「これは竜王グループが便宜上付けた名前です。」

本当の名前は

知りません」

「で？」

「本当の名前を、教えてくれますか？」

……ここから先は創也の仕事だ。

僕が横から口出しする必要

は無い。

でも、一つ言わせてもらいたい。

「アレックスが『^{プランナ}頭脳集団』だっていう証拠は？」

「いまからそれを証明するよ」

創也が、僕を見る。

「最初に引かなかったのは、この時期に転向してくるという事だ」

「だからいつ転校してくるのも人の勝手でしょう？」

「たしかにそうだ。でも、転入する日にちは基本的に先生達が決めるんだ。先生達がこのあわただしい時期に転入させると思うかい？」

アレックスは黙り込んだ。創也は続ける。

「次に引かなかったのが君が転入してきた日の放課後、僕と内人くんは教室に閉じ込められてしまった。爆弾入りのね」

「偶然では？」

「たしかにそういう考え方もできるが、爆弾があったのはアレックスくん、君のロッカーの中だ」

「……………」

「そして最後にさっきの事故。あれは事故なんかじゃない、君が細工をして起こしたものだ」

「どうしてそうだと？」

「劇の準備をする間に見ただけで、はしごがあった。普段は離れたところにある倉庫にあるはずなのにね」

「それも偶然、だれかが使った後だとしたら？」

「それも考えられる。でも、君はさっきの事故が起きた時にライトが落ちるのを確認して体育館を出たんだ。だから僕が怪我をしたと思った」

「……………」

「ただ、君一人じゃ転入する日程とかは決められないだろうから、恐らく先生達の中にもいるんだろうね。・・・仲間が」

「・・・なるほどね」

「なにか反論はあるかい？」

創也が聞いた。

「いや、無い。やっぱりすごいね、君は」

「アレックス！ お前なのか？」

「さっきの竜王さんの推理どおりだよ。でも、僕を捕まえる前に、残りのスポットライトが落下しないようにするのが先じゃないかな？」

「なに！？」

残りのライトが落下！？ それでは片付け中の人やメンテナンス中の人たちに被害が！！

「ちなみに、とめるためのリモコンは僕が持っている。君たちが追いかけてくればリモコンを押すし、追いかけてこなくても押す」

「卑怯だね、アレックスくん」

「卑怯なのはしょうがない。組織は君たちを排除する為なら手段を選ばない」

アレックスはそういいながら校門をくぐろうとする。

「じゃあね」

くそっ！ このまま逃がしてたまるか！！

僕の体は動いていた。目の前にあるサッカーボールをアレックスに向けて蹴っていたのだ。

ボールはスピードを落とす事も無くアレックスのもとに吸い込まれていく……。

「甘いよ」

アレックスは素早く後ろを向き右足でボールを蹴りかえた。

「うわっ」

「じゃ、さような」

ベチャッ

アレックスは何かにつまづき、転んだ。

「……創也、何かしたか？」

「いや、なにも」

……そんなことよりリモコンの回収だ！

結局、アレックスは逃げ、^{ブランチ}頭脳集団の本当の名前を知る事も出来なかった。

ただ、リモコンだけは入手でき、それをあの場で破壊した。

「で、創也。　なんでアレックスが転んだのか分かったか？」

「・・・ああ。　あの後調べてみたら、ちょうどアレックスが歩いてたところに油がたれてたんだ」

「・・・それで滑って転んだと」

「そういうことだ。　そして、その油の近くにこれが・・・」

『こんなこともあるかと思って塗っておいたわ』

・・・真田さん、あなたは女神だ！！

なにはともあれ、なんか変な終わり方だけど今回の事件はこれで終わりだ。

ちなみに、卓也さんの怪我は見た目ほどひどくないらしく、全治1週間らしい。

たぶん、この物語は思い出されることは無いだろう。
だからこれは、SECRET EPISODEなんだ。

「　データをセーブしますか？」

YES

↓NO

└

「　データをセーブしませんでした　」

8th Episode :: 謎解き (後書き)

これで終わります。

読んでくださった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2702h/>

都会のトム&ソーヤ SECRET EPISODE

2011年4月11日15時22分発行